横瀬浦公園

1561 年、平戸港でポルトガル人商人と地元の人々との間で暴動が起こり、14 人のポルトガル人が死亡した後、ポルトガル人たちは別の交易港を探し始めました。翌年、元商人のイエズス会士ルイス・アルメイダは、大名大村純忠から彼杵半島の北端に位置する横瀬浦を使用する許可を取りつけました。交易を促進するため、ポルトガル商人は 10 年間関税を免除されました。さらに、イエズス会には 2 リーグ（11km）の土地が与えられ、ここにはキリスト教徒以外は許可なく住めないこととされました。

教会が建てられ、商人たちが押し寄せた横瀬浦は。すぐに栄えた港となりました。1563 年、大村は横瀬浦の教会で洗礼を受け、バルトロメオという洗礼名を授かって初のキリシタン大名となりました。しかし、大村のキリスト教に対する熱意は家臣の反感を買い、これに乗じて反純忠派の家臣たちが横瀬浦を焼き討ちしました。その結果、南蛮貿易は再び平戸に戻り、その後福田に移り、1571 年以降、最終的に長崎に落ち着きました。栄えたのは短い期間ではあったものの、横瀬浦は日本における布教活動の責任者コスメ・デ・トーレスや「日本史」を著したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスなどの著名な人物が訪れた重要な場所です。